

# 海外果樹農業ニュースレター

(公財) 中央果実協会 (03) 3586-1381

2014年2月 第18号

写真：かんきつの花



## 果樹産業の動向

### 新戦略が求められる南半球リンゴ輸出国

The World Apple Report 誌 (2013年12月号)

#### - 目次 -

#### 果樹産業の動向

・新戦略が求められる南半球リンゴ輸出国 1

#### 現地報告

米国 3

フランス 4

タイ 5

豪州 5

#### 世界の果樹の需給

・2013/14年度における世界のカンキツ類の需給 6

これまで長い間、南半球の生鮮リンゴ輸出に対する期待は同じであった。南半球のリンゴ生産国は、北半球の裕福な消費者や巨大小売チェーンによる生食リンゴの周年供給という要求に応じて、ひたすら輸出を伸ばしてきた。南半球でのリンゴ生産の拡大は、豪州の生産技術の革新、世界の最先端を行くニュージーランドの単収の高さ、チリの生産コストの低さといったことに支えられてきた。

図1は1980年から2011年における世界の生食リンゴ貿易に占める南半球諸国(アルゼンチン、豪州、ブラジル、チリ、ニュージーランド(NZ)お

よび南アフリカ)のシェアの推移を示したものである。これを見て分かるように、1980-82年から2000-02年にかけて南半球諸国の金額ベースで見たシェアは増加傾向にあり、続く2003-05年も増大していた。しかしこの期間の数量ベースのシェアを見ると、金額ベースとは違ったやや変則的な動きとなっているが、基本的には2003-05年までは増大基調にあったといえるだろう。しかしこれに続く2006-08年、2009-11年の各3カ年の動きを見ると、数量ベースでも金額ベースでも南半球諸国のシェアは低下している。2009-11年のシェアを2003-05年と比較す

ると、数量ベースでは5ポイント低下し、金額ベースでも3ポイント低下している。

図2は図1と同じ時期について、それぞれの時期ごとに南半球諸国産生食リンゴの平均輸出価格が世界の平均価格に対してどのくらいの水準であったかを示したものである。これを見ると、南半球諸国は世界の生食リンゴ市場での価格優位性を次第に失ってきたことが分かる。南半球諸国は1980年代には、「ガラ」「ふじ」「プレイバーン」等の新品種を北半球諸国に先駆けて導入して、これらを大量に世界市場にいち早く供給することによってかなりの価格優位性を享受してきた。

図1 世界の生食リンゴ貿易に占める南半球諸国のシェア



果物を食べて  
応援しよう!

産地を応援

1980年から1985年の間、南半球産生食リンゴは毎年価格プレミアムを確保していた。図にはないが、1993年には世界平均価格に対し価格プレミアムは26.6%であった。1990-92年を除いて、1990年代を通じて南半球産はプレミアム価格を享受していた。しかし、2001年から2008年についてみると南半球産生食リンゴが価格プレミアムを手にしたのは僅か1年であった。しかしその後2009-11年には、新品種の登場により南半球産の平均輸出価格が上昇し、再び価格優位を確保している。

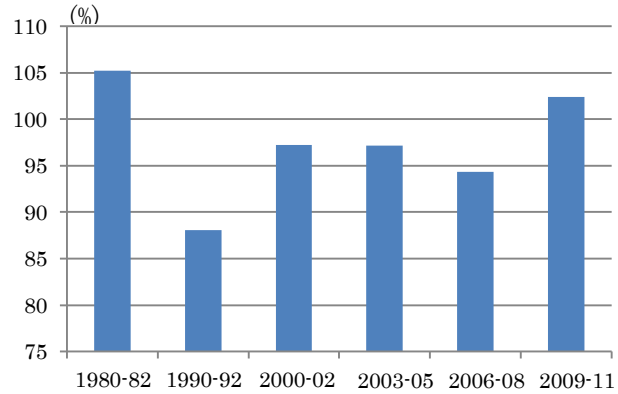
〈各国はどう対応するのか〉

南半球の生食リンゴ輸出国のうち、アルゼンチンと豪州は1980-82年から2009-11年の間、世界のリンゴ市場でのシェアを一貫して低下させている(表1)。南アフリカもやはりシェアを低下させているが、低下の度合いは穏やかなものである。これに対し、ブラジル、チリ、NZの3カ国は1980-02年から2000-02年の間一貫してシェアをアップさせてきた。しかし、その後ブラジルは2006-08年、NZは2003-05年になるとシェア低下へと転じている。チリも2006-08年まではシェアを増大させてきたが、2009-11年になると10.3%から9.4%へと約1ポイントの低下となっている。

南半球諸国がそれぞれ世界平均価格よりプレミアムな価格を手に入れられる理由は、国によってそれぞれ異なっている。豪州とNZはこれまでコンスタントに価格プレミアムを手にしてきたが、NZは近年価格プレミアムを失っており、豪州は輸出量自体が劇的に減少している。

この2カ国以外のアルゼンチン、ブラジルおよびチリの南米3カ国に南アフリカを加えた4カ国は、年により価

図2 南半球主要リンゴ生産国における世界輸出価格との比較



格の変動が激しく、世界市場でほんの僅かな価格プレミアムを手にするに過ぎなかった。チリと南アフリカがこの10年間で最高実績を上げたのは2009-11年である。

〈簡単に価格プレミアムを手にできる時代は終わった〉

入手し得るデータを見る限り、今後南半球諸国が北半球市場で販売量を増大することはかなり難しくなるだろう。つまり南半球諸国の生産者は、これからも北半球市場の生食リンゴ需要は増大するだろうという仮定の下に生産を拡大することはできなくなるということである。

北半球諸国では今後それほどの人口の増加は期待できず、経済成長率も鈍化ないし停滞すると見込まれており、有機栽培果実は別として需要の伸びは期待し難いだろう。さらに北半球のリンゴ生産国の米国、中国、ポーランド、トルコといった国々がそれぞれ生食リンゴの輸出増大を図っている。また、これらの国以外の国でも貯蔵施設の改良が進み、周年出荷を目指した出荷時期の長期化が進むだろう。

〈待たれる新戦略〉

もし南半球の生食リンゴ輸出国が、今後も生産を拡大し輸出を増大させようとするならば、これまで以上の厳しい努力と巧みな市場対応策が必要となる。既に彼らは、南半球で今後生食リンゴを売り込めそうな市場を開拓しようとしており、アジア諸国への売り込みの増大を図りつつあるが、こういった取組みを今後さらに強化する必要がある。

さらに、生産性の向上とともに価格プレミアムの低下を回避する戦略の強化が必要である。しかし北半球の生産国も必死に生産技術の革新に取り組んでおり、既に南半球諸国にとって手強い競争相手となり得る新品種「ハニークリズプ」「カンジ」「アンブロシア」といった品種の導入を進めている。

これまで南半球の生産国は北半球の競争相手と比べ、生食リンゴの主要市場から離れた立位置で生産していれば良かったが、今後

表1 南半球の主要リンゴ生産国における世界の生鮮リンゴ輸出に占める割合(1980-2011) (単位:%)

期間	アルゼンチン	豪州	ブラジル	チリ	NZ	南アフリカ	合計
1980-82	7.1	1.4	0	5.6	2.8	5.6	22.5
1990-92	5.7	0.7	0.4	9.6	5.3	5.4	27.0
2000-02	2.8	0.6	1.0	9.7	5.8	4.3	24.3
2003-05	3.5	0.3	1.7	10.1	5.1	4.5	25.1
2006-08	3.4	0.3	1.3	10.3	3.7	4.4	23.4
2009-11	2.5	0.1	1.0	9.4	3.6	4.0	20.4

表2 南半球主要リンゴ生産国におけるリンゴ輸出価格と世界平均輸出価格の比較 (単位:%)

期間	アルゼンチン	豪州	ブラジル	チリ	NZ	南アフリカ	合計
1980-82	115.9	103.2	NA	90.1	99.3	110.2	105.2
1990-92	69.4	120.3	97.3	67.7	131.9	96.5	88.0
2000-02	100.2	144.5	103.1	94.3	114.9	67.3	96.8
2003-05	77.4	158.5	83.9	80.9	145.8	94.6	97.1
2006-08	81.5	190.8	88.3	90.1	119.2	87.7	93.3
2009-11	98.7	217.6	80.0	101.0	114.0	101.8	102.4

北半球の競合生産国に伍していくためには生産性の向上、生産単価の引き下げに全力で取り組むことが必要だろう。しかも、これらを労働力不足、労賃上昇という条件下で行わなくてはならない。

もし南半球諸国がこれまでの北半球市場の「端境期」の供給者という概念に新たな意味づけを加えることができないならば、既に飽和状態にある生

食リンゴ市場で単なる限界供給者としてとどまるしかないだろう。

もちろん南半球諸国とひとまとめで呼んでいるが、克服すべき課題や成功への途は国によってそれぞれ異なることがあるだろう。しかし共通する課題も多い。既に南半球の果実生産国は南半球生鮮果実輸出協会 (SHAFFE: 本部ブラッセル) を組織し、市場情報の共有を図っている。今

後は SHAFFE を通じた情報の共有に加えて、別組織を立ち上げて研究や消費拡大についても共同で取り組んでいくことも必要となろう。



## 現地報告

### 米国：寒波によるカリフォルニア州カンキツ類の被害および 2014 農業法の成立について

中川 圭子

#### <寒波によるカリフォルニア州カンキツ類の被害>

カリフォルニア州内柑橘果実生産者団体であるカリフォルニア柑橘互助会 (California Citrus Mutual) による詳細な園地調査の結果によれば、昨年 12 月の寒波による州柑橘果実への被害額は 4 億 4,100 万ドルにのぼったという。さらにこれとは別に、12 月 3 日から 11 日に亘り、生産者達が園地を守るためにウィンドマシーンによる大気攪拌、灌漑等に投じた防衛コストは 4,900 万ドルと報じられている。

被害の度合いは品目により、また地域によって異なるものの、最も大きな被害を被ったのはミカン類で、未収穫分の 40%、40 ポンド箱 470 万箱分、1 億 5 千万ドル相当が、凍結して商品価値を失った。クレメンティン、ウンシュウミカン等のミカン類は近年カリフォルニアで著しい生産増がみられる柑橘果実であるが、その多くが寒波到来時に未収穫の状態にあった。ネーブルオレンジに関しては 2,200 万箱分 (収穫見込み総量の 30%)、レモンは 100 万箱分 (同 20%) に被害が及んだ。また地域別では、サンホアキンバレー南端に位置するカーン郡が最も大きな打撃を受けた地域の一つとされる。幸いなことに、生産者の約 90% は作物保険に加入しており、最悪の事態は免れた模様である。

カリフォルニア州内の柑橘果実収穫作業は平年であれば初夏まで継

続するが、この寒波により、2013/14 出荷年は 5 月中旬で作業が終わる見通しである。カリフォルニア州においては、本シーズンは州史上最悪と言われる干ばつに見舞われており、さらに柑橘グリーンング病の脅威にもさらされる中、生産者の多くは今後のビジネス展開に大きな不安を抱えている。

#### <2014 年農業法ようやく成立する>

難航していた米国の新農業法 (The Agricultural Act of 2014) がようやく上下両院を通過し、オバマ大統領の署名を経て、正式に立法化にこぎ着けた。米国農政の基幹をなす農業法は約 5 年ごとに改訂される期限法であり、本来であれば、2008 年農業法施行期限である 2012 年度末 (2012 年 9 月 30 日) までに新法が策定される予定であった。ところが共和、民主両党の意見が調整されず、やむなく現行農業法の施行期限を 1 年間延期するという臨時措置がとられたものの、延長期限の 2013 年 9 月 30 日を過ぎても新法が成立せず、泥沼化の状況に陥っていた。

共和、民主党間における意見対立の最大の焦点となったのは、食品栄養補助事業 (Supplemental Nutrition Assistance Program) 経費の削減幅である。民主党先導の上院案では今後 10 年間の削減幅を 40 億ドルにとどめていた一方、共和党先導の下院案には 390

億ドルに及ぶ削減が盛り込まれていた。2 月 7 日付けで成立した 2014 年農業法による削減幅は 80 億ドルで、民主党の主張に近いレベルで妥結する結果となった。また議会での今ひとつの主要な争点であった農家への直接補助金配布に関しては、直接配布事業を廃止してこれを作物保険に置き換えることで意見の調整がはかられた。

果実・野菜を主体とするスペシャルティ作物 (果実、野菜、ツリーナッツ、乾燥果実、園芸作物及び花きを含む苗床作物) は、今回成立した新農業法によって多くの恩恵をうける“勝者”のひとつとされる。業界内組織の「青果物連合 (United Fresh Produce Association)」によれば、2014 農業法規定に基づく生鮮果実・野菜関連事業費は向こう 5 年間で総計 40 億ドルと試算されており、前農業法規定下での事業経費と比較して 55% 増となっている。新農業法では、青果物輸出促進に大きな役割を果たして来た市場アクセス事業、学童への無償果実野菜配布事業である生鮮果実・野菜事業等が継続されることに加え、「健康奨励事業 (Healthy Incentives Program)」が新たに設立され、食品栄養補助事業向けにより多くの青果物が政府調達される枠組みが形成された。さらに、米国柑橘果実産業に脅威をもたらしている柑橘グリーンング病撲滅に向け、年 2,500 万ドルの研究資金が 5 年間に亘って確保された点も注目される。2014 年農業法規定に基づく主要果実関連事業別の予算規模は以下のとおりである。

- ☞ スペシャルティー作物向け技術支援 (Technical Assistance for Specialty Crops) : 900 万ドル/年
- ◆ 市場アクセス事業 (Market Access Program) : 2 億ドル/年
- ☞ 生鮮果実・野菜事業 (Fresh Fruit & Vegetable Program) / 最低 5 つの州で、缶詰、冷凍、乾燥製品を導入するパイロット事業開始: 1 億 5,000 万ドル/年
- ◆ 健康奨励事業 (Healthy Incentives Program) : 1 億ドル (5 カ年事業)
- ☞ 付加価値添加奨励: 6,300 万ドル
- ◆ スペシャルティー作物研究奨励事業: 8,000 万ドル/年, うち 2,500 万ドルは柑橘グリーンング病対策研究事業向け (2014-18 年)
- ☞ スペシャルティー作物ブロック (競争力強化) 奨励金: 7,250 万ドル (2014-17 年), 8,500 万ドル (2018 年)
- ◆ 作物病害対策事業: 6,250 万ドル (2014-17 年), 7,500 万ドル (2018 年)

議会予算事務局 (Congressional Budget Office) によれば、2014 年農業法規定に基づく直接経費は向こう 10 年間で 9,560 億ドル、その約 80% にあたる 7,560 億ドルが食品栄養事業費と試算されている。また同局では、本法によって 10 年間に、166 億ドルの財政赤字削減が達成されると予測されている。

## フランス： シードル（リンゴ酒）の生産・消費状況

佐川 みか

### <シードルとは>

シードルはリンゴで作るアルコール分 2~8 度の飲料で、フランスでは主にノルマンディー地方のものが有名である。シードル用のリンゴは甘みも少なく、生で食べると普通のリンゴのようにおいしくはない。近年は品種保存果樹園にしか残っていないような品種を混ぜて使う試験的生産が行われていて、筆者もそうしたリンゴを試食したことがあるが、苦くてとても生では食べられないものであった。フランスの法律は、リンゴに付いている酵母で発酵したものだけをシードルと呼ぶと規定しているので、酵母を加えたものはシードルの名称がつけられない。このため、バスク地方などで作られる酵母を加えたリンゴ酒は「リンゴの発酵飲料」と称される。フランスではシードルはワインを生産できない地方で、ワイン代わりに飲まれてきた。都会では地方の飲み物として主にクレープを食する機会に飲まれている。ワインがシードル産地の食卓でも手軽に飲まれるようになってきたせいか、シードルの生産量、消費量は、ともにイギリスなどと比べると低い。

### <1980 年代以来停滞していたシードルは 2013 年に成長>

ところが、1980 年代以来停滞していたフランスのシードル市場は、2013 年になって売上高 6% の成長

をみせた。これは様々な技術革新の成果とみられる。量的には年 1.2% 増と決して高い成長率ではないが、30 年来毎年 2% の減少傾向が続いていたことから、UNICID (シードルおよびシードル類果実生産者連合 (シードル用リンゴ・ナシ生産者 1 万世帯やシードル事業体 500 を集合)) はシードル市場の回復と喜んでいる。

シードルは主にリンゴ酒であるが、ポアレ (西洋梨酒) も業界や統計ではシードル類の一種とみなされる。そのポアレは 2013 年に売上高が 56% 伸びて、シードルの中でも成長率が高かった。ただし、ポアレの生産量はシードル全体の 1.1% に過ぎない。また 2 年前に、果肉の赤いリンゴで作られるピンク色のリンゴ酒が発売され、2013 年には 50% 以上の目覚ましい成長率を記録し、現在ではシードル市場の 5% を占めている。

### <子供や若者用にノンアルコールの発泡性リンゴジュース>

ノルマンディーでシードルを生産するある工場ではシードル用のリンゴ種から 22~23 百万リットルの果汁が搾られる。そのうち、8 百万リットルは炭酸を加えて直接、瓶に詰めて「シャンポミ」という商品名で出荷している。これは低温殺菌処理をした非アルコールの発泡性リンゴ

ジュースで、糖分、保存料、色素などは添加されていない。果汁 99% に対して炭酸が 1% 加えられている。フランスの大人がパーティーなどでシャンパンを飲む習慣を真似た子供や青少年用のパーティードリンクとして伸びている。この工場では他の瓶詰め企業へ 3 百万リットル売り、残りの 11~12 百万リットルがシードル生産に充てられる。

### <果肉の赤いリンゴを使ったシードルが人気>

この工場のシードルの中でも ECUSSON のブランドで売られているピンクシードルの販売は好調で、現在、出荷が注文に追いつかない状態である。しかし、関係者はこのような技術革新は必ずしも成功するかどうかはやってみないと分からない点や、また樹を植えてから商品化までに 10 年以上かかるため、長期の待機期間があることなど経営面ではかなりのリスクがあると語っている。

シードルはフランスで毎年約 1 億リットルが生産され、4 億ユーロの市場を形成している。シードルの 6 割は量販店で販売されるということである。



## タイ：旧正月のお供え用輸入果実の入荷量が2.6倍に増加ほか

坂下 鮎美

## 〈旧正月のお供え用輸入果実の入荷量が2.6倍に増加〉

バンコクの生鮮市場であるシーモムアン市場における2014年旧正月の1日当たりの果実入荷量は、通常の110トンの2.6倍に当たる285トンまで増加した。特に、1月始めから中国産のタンジェリン、ブドウ、リンゴ及びバナナやベトナム産のドラゴンフルーツといった旧正月のお供え用の輸入果実の入荷が増加した。その要因の一つは、輸入果実の価格が国内産より安価なことにある。例えば、中国産タンジェリンは1kg当たり30～40バーツで購入することができるのに対し、タイ産は60～80バーツとなっており、タイでは生産できない果実を消費者が満足できる品質で安価に購入できることが利点となっている。

輸入果実は、物流管理や流通管理が向上していることから、今後、さらに増加すると見込まれる。以前は、中国産果実は船で10日～15日をかけて輸送されていたが、陸上輸送の利便性が高まり、4～6日で温度管理が可能な車両でタイに到着することができるようになったため、品質が向上していることも要因の一つである。一方で、グアバやローズアップルといった国内産果実の入荷量は落ち込んでいる。

旧正月のお供え用に購入されるタンジェリン、ブドウ、ココ

ナッツ、バナナ、リンゴ、ナシ、ドラゴンフルーツなどの果実は、年々量と質に対する需要が高まっている。

(2014年2月4日付け「ドンムアン・パッタナー」紙)

## 〈農業経済局は2014年のパインアップル価格は継続的に上昇と予測〉

農業経済局によると、パインアップルの農家庭先価格は昨年より継続的に上昇しており、2014年1月も引き続き高値を付けているという。2013年の第1四半期のパインアップルの平均農家庭先価格は3.37バーツ/kgであったが、第2四半期は3.92バーツ/kgとなり、第3四半期では4.09バーツ/kg、第4四半期は5.58バーツ/kg、2014年1月には5.88バーツ/kgにまで上昇した。前年同期が2.96バーツ/kgであったことから99%上昇したことになる。また、パインアップルの農家庭先価格は今後も引き続き上昇する傾向にあると予測している。これは、2013年は干ばつの影響で出荷量が205.8万トンまたは12%減少したためである。

(2014年2月7日付け「ネーオナー」紙)

## 豪州：ブドウの中国および韓国向け輸出についてほか

トニー・ムーディ

## 〈豪州産ブドウの対中輸出を巡る問題〉

豪州産生食ブドウの中国向け輸出は、船積み前の植物検疫でかなりの数に上るコンテナが撥ねられたため、シーズン終了期の7月末に中断された。今後も中国向け輸出を続けるためには、生食ブドウ業界は追加的なコスト負担とともに、中国の植防当局に対し植物検疫規則を満たすための方策をきちんと示すことが求められている。

今年の対中輸出向け生食ブドウの船積み前検査申請件数は全部で353(コンテナ数では377)に上ったが、検査を通ったのは228件(249コンテナ)にとどまった。検査不合格となった理由としては、木箱の衛生条件不備、生きている害虫あるいは死んだ害虫が見つかったこと等様々である。中でも、31コンテナからはいずれも検疫条件で存在することが禁じられているリンゴウスチャイロハマキ(*light brown apple moth*)やセアカゴケグモ(*red-back spider*)が発見されている。

中国の検査官の検査は厳しく、土壌、腐敗果、木の枝、鳥の羽、種子等が見つかったコンテナは全て検査で撥ねられている。豪州生食ブドウ協会(ATGA)および豪州政府当局は中国の輸入当局(中国国家質量監督検疫総局:AQSIQ)と緊密な連携を保っており、中国側は豪州の専門家とも協力して速やかに検疫プロトコルを見直したいとしており、この見直しが行われれば2014年には中国向け生食ブドウの輸出は正常化するものと見られている。

## 〈韓国向け生食ブドウの輸出が間近〉

韓国と結ばれた自由貿易協定により、豪州産生食ブドウの韓国向け輸出が認められることになった。この韓・豪自由貿易協定は今年1月9日に公示されたが、これを受けて韓国向け生食ブドウの輸出は2014年2月にも始まると見られ

ている。豪州産生食ブドウの2013年の輸出量は全体で7.7万トンであったが、今後3年から5年で韓国向け輸出量が年間1万トンになると見られている。

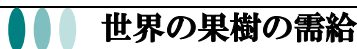
## 〈リンゴおよびオウトウの生育状況〉

2013/14年度の豪州南部の果樹生産地域の気象条件は異常であった。南オーストラリア州、ビクトリア州、ニューサウスウェールズ州の主要果樹産地は早春の9月は暖かかったが10月には厳しい降霜に見舞われ、タスマニア州でも10月に例年になく降雨と強風に見舞われた。特に降霜の被害が激しかったのは、結果時期だったニューサウスウェールズ州のバトロー地方とオレンジ地方で、被害速報によるとリンゴは15～20%の減収見込みという。オレンジ地方は霜による被害に加え、標高の高い所にある果樹園では降雹被害も起きている。

ビクトリア州および南オーストラリア州はリンゴとナシを中心とした果樹産地であるが、降霜被害は局地的なもので全体的に見てそれほど被害はなかった模様である。

しかし、豪州南東部のリンゴ産地はクリスマス以降異常な高温と乾燥した強い風に見舞われて、さらに灌漑用水不足もあって品質低下は必至と見られている。

オウトウの熟期はリンゴよりかなり早いので、オウトウ産地のほとんどで作柄は上々で、例年以上の収量となっている。オウトウ生産者は温暖な気候を歓迎し、この時期あまり雨が来ないように願っている。しかし干ばつ気味の天候ということでは水分過多でないということであり、オレンジ地方のオウトウの収穫は乾燥状態が続く1月初めには終わると見られている。オレンジ地方のオウトウ生産量は記録的な水準で、かなりの量が海外に輸出されている。



## 2013/14 年度における世界のカンキツ類の需給

米国農務省海外農業局 HP より (2014年1月公表)

### <オレンジ>

2013/14 年度における世界のオレンジ生産量は、米国における継続的な減少を相殺する以上にブラジル、中国および EU において増加することから、前年より 5%増加して 5,180 万トンと予測されている。貿易量は強い需要と供給可能数量の増加により記録的な水準に達すると予測されている。

**米国**の生産量は 11%減少して 670 万トンと予測されている。フロリダではオレンジの生産量の 95%がオレンジジュースの加工用に用いられているが、年度初めにおける乾燥した気象条件とカンキツグリーンング病が激しい落果(過去 50 年間で最も高い落果量と予想されている)を引き起こした。カリフォルニアではオレンジの大部分は生鮮市場向けであるが、生産量は 5%減少し、また 12 月の凍害を受けた果実はジュース用として出荷されるであろう。輸出量は輸出可能数量の減少により 6%減ると予測されている。

**ブラジル**の生産量は、高単収と良好な気象条件により 8%増加して 1,780 万トンと予測されている。増加量のほとんどすべては加工用に用いられ、生鮮消費量には変化はない。圧倒的な世界最大のオレンジ時生産国であるが、輸出量は生産量の 1%以下にとどまっている。

**EU**の生産量は、良好な気象条件により 10%以上増加して 660 万トンと予測されている。輸入量はわずかに増加すると予測されており、南アフリカとエジプトが最大の供給国である。南アフリカからの輸入は、黒星病の多重的な検出により 2013 年 11 月 28 日から 12 月末まで禁止された。

**中国**の生産量は 10%近く増加し 760 万トンと予測されており、生鮮消費および加工の増加と同じペースで増加している。継続的な生産量

の拡大を目的として、シーズンの初期と後期の両方で収穫できる新しい品種の栽培が行われている。

**メキシコ**の生産量は 10 万トン減少の 390 万トンと予測されている。国産の生鮮オレンジには価格の優位性があるため、生鮮消費量の増加に伴い、加工用果実は減少した。メキシコの生鮮オレンジの貿易は無視できる程に少ない。

**エジプト**の生産量は、良好な気象条件と新植樹が結果樹齢に達したことによる収穫面積の急増により 5%増加して、記録となる 260 万トンと予測されている。輸出量は、増加分の果実が EU、サウジアラビアおよびウクライナからの需要の増加に対応できることから 5%増加すると予測されている。

**南アフリカ**の生産量はわずかに増加して 150 万トンと予測されている。世界最大の輸出国として南アフリカは世界の貿易量の 25%以上を占めており、輸出量は記録となる 120 万トンと予測されている。EU とロシアが南アフリカの輸出市場の半分を占める。

**モロッコ**は、干ばつの被害を受けた後、生産量が大幅に増加して記録の 100 万トンと予測されている。良好な気象条件に加えて、新規の栽培に対する支援金、灌漑施設に対する補助金および生産者に対する作物保険を含む政府のカンキツ政策の結果として栽培面積が増加した。輸出可能な供給品に対する高い需要と利益によって、輸出量は倍増以上の 16 万トンと予測されている。

### <オレンジジュース>

2013/14 年度における世界のオレンジ果汁の生産量(65°ブリックス換算)は 200 万トンと予測されており、米国およびメキシコの減少を相殺する以上にブラジルが増加することに

より、前年度から 6%増加する。世界の輸出货量および消費量は比較的变化がなく、在庫量は再び減少する(4年間で最少)。

**ブラジル**の生産量は、搾汁率の向上により 18%増加して 120 万トンと予測されている。しかしながら、世界最大の生産国からの輸出货量は、EU および米国における強い需要に支えられ、生産量を上回ると予測されている。その結果、在庫量は減少する。

**米国**の生産量は 12%近く減少して 55 万トンと予測されている。フロリダにおけるオレンジの推定減少量(一部はグリーンング病による)が過去 50 年で最大と予想されている。消費量および輸出货量は生産量の落ち込みの結果として減少するが、一方期末在庫は過去 3 年間とおおむね同じレベルを維持する。

**メキシコ**の生産量は、国産果実の価格優位性があるため、多くの生鮮オレンジが加工より生鮮として消費されるため、25%以上減少して 10 万トンと予測されている。この結果、利用可能な供給量の減少により輸出货量は 25%以上減少すると予測されている。在庫量は、2 年前に国際的に需要が高かったため、ゼロに落ちた後、例年の傾向に戻ると予測されている。

**EU**の生産量は、加工用により多くの果実が仕向けられるため、12%増加して 10 万トンと予測されている。輸入量については、ブラジルと米国を主要な供給国として引き続き変化がない。

**中国**の生産量は、多くの果実が加工に仕向けられるので、3 分の 1 増加して記録の 6 万トンと予測されている。増産分はオレンジジュースの人気が高まっている国内市場に主として提供されるであろう。

世界のオレンジの需給

(単位:1,000トン)

国名	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14
生産量						
ブラジル	17,014	15,830	22,603	20,563	16,361	17,750
中国	6,000	6,500	5,900	6,900	7,000	7,600
米国	8,281	7,478	8,078	8,166	7,574	6,707
EU-27	6,530	6,244	6,198	6,023	5,878	6,600
メキシコ	4,193	4,051	4,080	3,666	4,000	3,900
トルコ	2,372	2,401	2,430	2,350	2,450	2,570
南アフリカ	1,430	1,690	1,710	1,650	1,600	1,700
その他	1,445	1,459	1,428	1,450	1,400	1,500
合計	3,553	3,498	3,547	3,157		1,000
合計	50,818	49,151	55,974	53,925	49,397	51,773
輸入量						
EU-27	846	959	800	821	876	900
ロシア	436	478	573	495	511	550
サウジアラビア	270	301	309	347	323	350
香港	176	193	200	188	217	220
イラク	66	70	124	196	165	220
UAE	172	182	167	196	203	210
カナダ	177	204	211	190	199	200
その他	966	1,026	1,108	1,206	1,163	1,183
合計	3,109	3,413	3,492	3,639	3,657	3,833
輸出量						
南アフリカ	869	1,045	942	1,065	1,100	1,150
エジプト	774	850	1,000	900	1,000	1,050
米国	493	670	750	695	681	640
EU-27	236	272	318	282	322	330
トルコ	256	209	339	357	244	310
モロッコ	305	161	175	138	70	160
豪州	134	89	85	115	133	140
その他	438	474	358	342	269	301
合計	3,505	3,770	3,967	3,894	3,819	4,081
国内生鮮消費量						
中国	5,729	6,220	5,727	6,349	6,405	6,795
EU-27	5,869	5,717	5,324	5,506	5,282	5,871
ブラジル	5,277	4,827	5,488	7,079	5,447	5,501
メキシコ	3,188	3,167	3,156	2,852	2,643	2,895
エジプト	1,553	1,503	1,350	1,365	1,365	1,435
トルコ	1,115	1,409	1,315	1,224	1,290	1,320
米国	1,264	1,360	1,411	1,526	1,559	1,312
モロッコ	453	627	689	652	655	740
その他	3,997	4,206	4,390	4,136	4,264	4,497
合計	28,445	29,036	28,850	30,689	28,910	30,366
加工量						
ブラジル	11,711	10,975	17,095	13,476	10,906	12,241
米国	6,614	5,554	6,019	6,064	5,473	4,895
EU-27	1,271	1,214	1,356	1,056	1,150	1,299
メキシコ	1,000	880	930	830	1,350	1,000
中国	182	202	180	520	600	780
コスタリカ	196	235	210	275	220	220
南アフリカ	443	280	348	245	160	160
その他	560	418	511	515	466	564
合計	21,977	19,758	26,649	22,981	20,325	21,159

世界のオレンジ果汁の需給

(単位:1,000トン(65°Brix))

国名	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14
生産量						
ブラジル	1,273	1,145	1,600	1,268	981	1,160
米国	761	603	660	685	607	540
EU-27	99	94	105	93	89	100
メキシコ	105	88	91	83	135	100
中国	14	16	14	40	45	60
その他	74	59	61	60	50	58
合計	2,326	2,004	2,531	2,229	1,907	2,018
輸入量						
EU-27	963	796	686	682	685	690
米国	228	236	191	160	302	275
カナダ	111	106	103	101	100	100
日本	75	64	87	82	65	75
中国	43	60	77	60	59	60
その他	129	137	152	142	141	139
合計	1,549	1,399	1,295	1,227	1,352	1,339
輸出量						
ブラジル	1,283	1,173	1,185	1,190	1,200	1,220
米国	90	106	151	109	122	115
メキシコ	99	82	85	79	128	93
EU-27	40	45	47	52	51	50
南アフリカ	17	18	18	18	14	14
その他	29	26	31	30	29	30
合計	1,558	1,449	1,518	1,478	1,544	1,522
国内生鮮消費量						
EU-27	1,022	845	744	723	723	740
米国	865	832	810	703	778	701
中国	60	61	75	102	115	121
カナダ	108	105	99	96	96	96
日本	73	74	75	76	75	75
その他	193	205	223	214	213	219
合計	2,321	2,121	2,026	1,914	2,001	1,952
期末在庫						
米国	498	400	290	322	331	330
ブラジル	128	65	440	474	205	93
EU-27	15	15	15	15	15	15
日本	12	2	14	20	10	10
韓国	2	2	2	2	2	2
その他	21	26	31	23	8	4
合計	676	510	793	856	571	454

注) 2007/08年度以降1トン(65°ブリックス) = 344.8ガロン(42°ブリックス)、1392.6ガロン(100%果汁換算)。

世界のタンゼリン/マンダリンの需給

(単位:1,000トン)

国名	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14
生産量						
中国	12,650	14,200	14,000	16,000	17,000	18,200
EU-27	3,172	3,054	3,245	3,099	2,930	2,925
日本	1,007	1,116	857	1,001	846	930
トルコ	756	846	858	875	876	880
モロッコ	532	635	716	730	660	850
米国	449	578	643	635	661	674
韓国	593	740	565	586	667	645
その他	1,232	956	1,094	926	908	920
合計	20,391	22,125	21,978	23,852	24,548	26,024
輸入量						
ロシア	520	593	717	704	787	840
EU-27	377	417	334	342	316	320
ウクライナ	113	144	185	179	185	190
ベトナム	256	202	156	202	144	170
米国	131	128	151	147	154	155
タイ	31	33	37	139	150	150
カナダ	121	124	123	129	143	145
その他	314	300	332	385	246	284
合計	1,863	1,941	2,035	2,218	2,114	2,254
輸出量						
中国	740	712	607	840	702	800
トルコ	382	330	450	474	407	480
EU-27	258	267	364	392	398	405
モロッコ	332	323	349	344	305	250
南アフリカ	102	113	104	115	126	130
アルゼンチン	113	119	115	100	90	90
イスラエル	54	68	56	83	78	82
その他	39	43	59	43	48	49
合計	2,020	1,975	2,104	2,391	2,154	2,286
国内生鮮消費量						
中国	11,371	12,977	12,926	14,568	15,650	16,814
EU-27	2,930	2,812	2,720	2,702	2,550	2,563
ロシア	518	592	716	704	787	840
日本	904	994	791	903	780	830
米国	440	530	583	596	610	617
韓国	503	612	482	480	607	575
モロッコ	200	312	367	386	355	555
その他	1,980	1,812	1,830	1,922	1,826	1,837
合計	18,846	20,641	20,415	22,261	23,165	24,631
加工用						
中国	550	520	480	600	660	600
EU-27	361	392	495	347	298	277
米国	111	142	159	149	163	170
日本	109	130	85	115	81	118
韓国	89	124	81	103	56	65
モロッコ	0	0	0	0	0	45
アルゼンチン	97	91	145	40	30	35
その他	71	51	49	64	55	51
合計	1,388	1,450	1,494	1,418	1,343	1,361

世界のグレープフルーツの需給

(単位:1,000トン)

国名	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14
生産量						
中国	2,520	2,900	2,800	3,200	3,370	3,770
米国	1,183	1,123	1,138	1,047	1,074	976
メキシコ	432	401	397	415	420	420
南アフリカ	370	343	406	300	410	375
トルコ	168	191	213	230	200	235
イスラエル	233	235	190	245	208	210
EU-27	85	95	83	102	111	120
その他	237	140	160	100	70	60
合計	5,228	5,428	5,387	5,639	5,863	6,166
輸入量						
EU-27	399	389	348	356	335	340
ロシア	86	112	117	113	141	145
日本	180	168	167	149	134	135
カナダ	48	46	45	44	43	42
ウクライナ	16	21	23	27	30	35
中国	6	7	12	13	17	25
香港	16	18	18	24	15	15
その他	38	37	24	21	21	21
合計	789	798	754	747	736	758
輸出量						
南アフリカ	210	187	217	180	242	215
トルコ	102	119	84	118	130	180
トルコ	128	154	153	177	132	165
米国	247	242	227	209	184	150
イスラエル	85	84	83	78	79	78
EU-27	21	22	20	18	21	20
メキシコ	11	18	17	19	19	20
その他	21	15				

(公財) 中央果実協会

編集・発行所

公益財団法人 中央果実協会  
〒107-0052  
東京都港区赤坂 1-9-13  
三会堂ビル 2階

電話 (03)3586-1381  
FAX (03)5570-1852

編集・発行人  
佐藤 典良

印刷・製本  
(株) 丸井工文社



毎日くだもの 200 グラム運動

本誌についてのご質問、お気付きの点などがある場合、または他に転載する場合には、左記上にご一報くださるようお願いいたします。許可なくしての転載および複写(コピー)は著作権の侵害となることがありますのでご注意ください。

本誌の翻訳責任は、(公財) 中央果実協会にあり、翻訳の正確さに関して Belrose 社 (The World Apple Report) は、一切の責任を負いません。

世界のレモンの需給

(単位:1,000トン)

国名	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14
生産量						
メキシコ	1966	1891	2133	2055	1950	2000
EU-27	1263	1160	1380	1264	1165	1345
米 国	827	800	835	771	827	790
トルコ	672	783	787	750	680	760
アルゼンチン	1350	1000	1550	1300	1300	750
南アフリカ	214	216	257	260	245	265
イスラエル	29	48	30	53	51	55
その他	51	53	60	68	56	52
合 計	6372	5951	7032	6521	6274	6017
輸入量						
米 国	398	401	402	475	478	480
EU-27	405	471	421	440	422	440
ロシア	203	211	222	200	212	225
サウジアラビア	100	108	116	85	111	115
カナダ	58	65	78	88	100	105
UAE	44	54	55	63	78	90
ウクライナ	58	62	64	62	63	65
その他	95	83	87	84	80	81
合 計	1,361	1,455	1,445	1,497	1,544	1,601
輸出量						
メキシコ	445	456	432	625	525	530
トルコ	351	434	457	429	369	440
アルゼンチン	250	264	255	267	280	250
南アフリカ	130	145	162	165	175	170
米 国	93	93	102	95	110	120
EU-27	87	67	68	92	77	100
モロッコ	0	6	5	7	10	9
その他	15	9	8	9	8	9
合 計	1,371	1,474	1,489	1,689	1,554	1,628
国内生鮮消費量						
EU-27	1,364	1,395	1,386	1,377	1,326	1,442
メキシコ	1,208	1,141	1,361	1,121	1,111	1,156
米 国	787	739	835	964	921	880
トルコ	296	290	271	259	258	262
ロシア	198	210	222	200	212	225
サウジアラビア	100	108	116	85	111	115
カナダ	58	65	78	88	100	105
その他	319	329	372	385	379	379
合 計	4,330	4,277	4,641	4,479	4,418	4,564
加工用						
アルゼンチン	1,050	698	1,211	963	955	450
メキシコ	314	295	342	310	315	315
米 国	345	369	300	187	274	270
EU-27	217	169	347	235	184	243
南アフリカ	73	60	82	84	59	83
トルコ	30	60	60	65	55	60
日 本	2	2	3	3	3	3
その他	1	2	2	3	1	2
合 計	2,032	1,655	2,347	1,850	1,846	1,426

増大すると予測されている。

EUの生産量、貿易量および消費量は事実上変化がない。

日本の生産量は、国内生産サイクルにおいて「表年」と考えられていることから、10%増大し、93万トンと予測されている。生鮮消費量は供給可能量の増加によって増えると予測されているが、一方輸入量は2万トンのままである。

トルコの生産量は88万トンで、わずかに増加すると予測されている。輸出量は、強い需要とまたタンゼリン以外の他のかんきつの入手可能性が増えたことによる国内消費量の減少によって、20%近く急増して48万トンと予測されている。

モロッコの実験量は、良好な気象条件と栽培面積の拡大によって、記録の85万トンに回復すると予測されている。新規の栽植に対する支援金、灌漑

施設に対する補助金および生産者に対する作物保険を含む政府のキャンキツ政策の結果、栽培面積が増大した。輸出量は、果実の品質が低いことから減少する。

<グレープフルーツ>

2013/14年度における世界の生産量は、米国および南アフリカの減少を相殺する以上に中国において増加するため、5%以上増加して620万トンと予測されている。世界の輸出量は、中国における高い需要によって消費量が7%増大することから、わずかに増加すると予測されている。

<レモン/ライム>

2013/14年度において世界の生産量は、EUおよびモロッコの増加を相殺する以上にアルゼンチンにおいて霜害によって引き起こされた激しい減少のため、4%減少して600万トンと予測されている。しかしながら、世界の輸出量は、トルコおよびEUが増大する需要に対応することから、5%近く増えると予測されている。

<タンゼリン/マンダリン>

2013/14年度における世界の生産量は記録となる2,600万トンで、中国およびモロッコの増加によって前年から5%以上増加すると予測されている。生鮮消費は高い需要と供給量の増加によって引き続き増える。輸出量は需要の増加に伴い増えると予測されている。

米国の生産量はわずかに増加して記録の64万4千トンと予想されており、輸入量と生鮮消費量については変化がない。この予測は1月の米国農務省農業統計局作物生産報告に基づいており、この報告では12月の凍害によって被害を受けた果実はジュースに加工されるとしている。

中国の生産量は、良好な気象条件と単収の増加によって120万トン急増して記録の1,820万トンと予測されている。中国は世界の生産量の70%、また世界の輸出量の35%を占めている。生鮮消費量の増加は生産量とほぼ同じペースで増加すると予測されている。輸出量は、供給可能量の増加と国際的な強い需要によって